

親鸞の仏身觀

浅井成海

親鸞の仏身論には二身説三身説四身説などがある。

二身説には、二通りの説き方があり、第一に真身と化身と示す場合に、法然の二身説をうけるものである。法然は、真身を酬因感果の弥陀如来であり、『觀經』に説かれる阿弥陀如来を真身と詳述している。そして化身は、無而歟有の身で機に應じ、時に應じて現ずる仏身であると述べる。この場合、真化二身は、別体ではない。真身が機に順い、時に順い現するのである。法然によれば、化身と化仏は同一であり、この化仏に四種の化仏をあげている。①円光の化仏、②撰取不捨の化仏、③来迎引接の化仏、④十方衆生の本尊の化仏の四種をあげるが、親鸞は、法然のこの真化二身論を継承するのである。すでに『大經』の三輩段の中輩には、真仏の如く化現する「化仏」の臨終来迎を説き『觀經』「九品段」では、上品上生、上品下生、下品上生、下品中生等に化仏来迎が説

かれている。この要旨をうける經・釈を親鸞の著述の各所に引くのである。例えば「礼讃」の文より

阿弥陀仏を称礼し、彼国に往生せむと、彼仏即ち無数の化仏、無数の化觀音勢至菩薩を遣して行者を護念したまう

〔行巻〕真聖全二・二〇頁

と引き、

『大經』三輩の文を『三經往生文類』の觀經往生積下に、「真仏の如くに大衆とともに化仏来迎し、化仏に随って、往生する」と引くのである。

また『唯信鈔文書』では「自来迎」の文を解釈して

自来迎といふは、自はみづからといふ弥陀無数の化仏・無数の化觀世。化大勢至等の無量無数の聖衆みづからつねにときをきらはず、ところをへだてず、真実信心をえたる人にそひたてまつりてまもりたまうゆへに

（真聖全二・七八九頁）

とあきらかにしている。臨終来迎の意を、平生における擁護

・護念とみている。現生正定聚の人に平生來迎を説くのである。臨終來迎の化仏を語る文も、すべて平生において化仏に護念されると説くのである。

この化仏について「能念皆見仏菩薩」の文を解釈して「化仏菩薩とまふすは、阿陀の化仏觀音勢至等の聖衆なり」（銘文眞聖全二P596）と定義ずけて、真仏の化身であることをあきらかにしている。また「現世利益和賛」

無碍光仏のひかりには、無数の阿彌ましまして

化仏のおのことごとく 眞実信心をまもるなり

（眞聖全二・四九九頁）

無碍光仏の光明中に無数の阿彌陀・無数の化仏ましますを讃えるのである。このように法然の眞身・化身を繼承しながら、平生護念のところで、真仏の無碍自在の光明撰取の働きをあらわす化仏を語るのである。

いま一つの見方は、真仏は、本願酬報の報身であり、化身は化土に顯現する仏であるという見方である「眞仏土卷」の結びには、眞仮を対比して、真仏、眞土をあきらかにした後に「仮の仏土の業因千差なれば、土も復千差なるべし、是を方便化身・化土と名く。眞仮を知らざるに由て、如来広大の恩徳を迷失す」と如来広大の恩徳を知らざるものが自らの仮の業因によって得ていく化身、化土であり、その仏土また、千差万別なることを示すのである。これをより明示するもの

は、「化卷」冒頭の文である。

謹て化身土を顯さば、『無量壽仏觀經』の説の如く、眞身觀仏是也、土は『觀經』の淨土是れ、復『菩薩廻胎經』等の説の如し、即ち憊慢界是也、亦『大無量壽經』の説の如し、即疑城胎宮是也

（眞聖全二・一四三頁）

と述べる。『觀經』所説の淨土は、化土であり、『菩薩廻胎經』に説かれる憊慢界、『大經』に説かれる疑城胎宮と同一の土とみている。『大經』胎化段の文を化卷に引証するが、善根を修め淨土を願う人々は、仏智を疑惑し、信罪福心をもつて、宮殿の内に、五百歳の間あつて、見仏せず、經法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆をみずと説いて胎生をあらわすのである。親鸞は「眞仮皆な是れ大悲の願海に酬報せり、故に知ぬ。報仏土也といふことを」とあるように大悲の願海にあつて、報土中に垂化した仏身、仏土であることが知られる。

しかも『觀經』に説かれる眞身觀の仏を化身としてあらわす。『觀經』眞身觀の仏を法然は、報身の眞仏とみるのであるが、親鸞は隱顯の義でこれを見るから、顯の義によれば「身の高さ、六十万億那由他恆河沙由旬」と限られた数の仏は、化仏となる。『化卷』では、道場樹の顯成就文を引き、化土の樹木とする。業因、千差であるから胎宮で見仏する仏身もそれぞれ千差であり、大小さまざまな數量であらわすことの出来る仏身を化仏とする。これらを代表せしめて、眞身

親の仏を化仏としたのである。⁽⁶⁾

二

三身論については『末灯鈔』において

三身といふは、一つには法身、二つには報身、三つには応身なり、
いまこの弥陀如来は報身如来なり (真聖全二・六六八頁)

と、法、報、応の三身説を述べ「弥陀如来は報身如来なり」と報身中心の主張をしている。『愚禿鈔』でも、「法身の証成、報身の証成、化身の証成」と三身をあげている。⁽⁷⁾

従来、仏教では、仏身を三身で述べる。その経論釈は多く、なかでも『大乘義章』の定義は、最も知られるところである。⁽⁸⁾ 法身とは、無始法性を体とし、真如の顯了したものをいい、報身は、酬因の身をいう。応身は有作行徳する身で、衆生の呼喚に應じて、化事を示すので応徳の体より応身という⁽⁹⁾と述べている。その他智顗等の解釈においても、基本的な立場は変わらない。⁽¹⁰⁾ これらの三身観は、浄土教の諸師の仏身観にそれぞれ継承展開されるところである。道綽の『安樂集』では、法・報・化の三身をあげる。善導また「玄義分」等で法・報・化の三身論をあきらかにする。⁽¹¹⁾ ここでいう化身とは応身であり、釈尊の如く機に應じ、穢土出現の化身を説く。法然また「逆修説法」において法報応の三身を説く。

このように三身観は、仏身観の中でも最も中心となる見方

である。親鸞またこの三身論を継承するのである。著述、法語等において、この三身論に直接言及するところは、少ないが、三身の内容については、親鸞の著作のそれぞれに述べる⁽¹²⁾ところである。

法身については、

涅槃界者は即是究竟法身なり、究竟法身を得るは、則ち一乗を究竟するなり、異こと如来无しまさず、異こと法身无まさず如来は即法身なり…… (一乗海釈(行巻・九八頁))

と述べている。涅槃を究極の法身とあらわし如来とあらわす。一乗海釈は誓願一仏乗が、絶対の救いであることを示すのであるが、無色無形の妙果を法身とあらわし、一切衆生の救いのために動的な働きを示す。その源をあきらかにする。また「証卷」では、証とは何かを述べて、まず「無上涅槃之極果」とあらわし、滅度、常樂畢竟寂滅、無上涅槃、無為法身、実相、法性、真如、一如とその証果の異名をあげるのである。とくにさとりの内容を種々の異名であらわしました、無為法身と仏身で述べる。無為法身とは、『論註』に「無為法身法性身也。法性寂滅故法身無相也。無相故に能く相ならざるなし」とあるをうけるのであり、言語、思惟をこえたさとりの内容を仏身であらわすのである。⁽¹³⁾ これをまた『唯信鈔文意』には「涅槃とまうすにその名無量なり、くはしくまうすにあたはず、おろおろその名をあらはすべし」と十二の異名

をあげ、法身、如来等の仏身に關わる名もあげられている。⁽¹⁾

報身とは、因願酬報の身であり、「真仏土卷」の冒頭において、仏は不思議光如来であり土は無量光明土であると表わした後に「然れば則ち、大悲の誓願に酬報する故に眞の報仏土なり」と述べる。

また「真仏土卷」の結びにおいて「夫れ報を按ずれば、如来の願海に由て、果成の土を酬報せり故に報と曰うなり」と願海に酬いる仏身、仏土となることをあきらかにする。⁽²⁾

このあと『論註』七文を引証するが、法藏の大願業力を説きた、不虛住持功德の文を引いて、阿弥陀仏の本願力は、因願、果力相府^{なう}ことを説く。法藏の願心の如くに成就された報身であることが、知られる。善導の六文引証によつても証されるのであるが、とくに「玄義分」二乗種不生積文を引き、弥陀は応身なりという主張を批判し、「是報非化論」を説く。「報應一身は眼目の異名」であるとして善導は、どこまでも弥陀報身説を強調するが、これらの諸文を引証することによつて親鸞もまた、弥陀報身説を明示する。⁽³⁾なお三身の關わり等については、後述したい。

応身が、教化の機に應ずる身であることは上述の如くであるが、これもまた引証の文によつて、親鸞の意うけとめることが出来る。「真仏土卷」引用の善導の文（二乗種不生の文）

には「縱使無窮の八相名号塵沙なり体に剋して論ぜば、衆べて化に歸して撰す」と無數の八相成道や仏名が、説れても歸するところみな化身におさまることを述べている。⁽⁴⁾八相成道をもつて生涯が示される積尊また化身とみるのである。いまここで説かれる化身は、機に應じ穢土出現の応身と同意であることが知られるのである。

親鸞の仏身観をあきらかにする上で重要な問題は、積尊をどうみているかである。すでに種々の研究がなされているが、弥陀は、彼土より招喚し、釈迦は此土より發遣する二尊二教の見方である。これは、善導の「玄義分」「釈迦は此の方より發遣し、弥陀は即ち彼の国より來迎す、彼に喚び此に遣はす」の文、或は、「散善義」深信釈下では、弥陀の仏願を深信することは、釈迦の説示する『觀經』を深信することであり、『弥陀經』に示される一切諸仏の証勸を信ずることであると述べ、弥陀の願意を開示した釈迦一仏の所説と一切仏の同証を信すべきことが説かれるのである。また廻向發願心釈下の二河白道の譬えでは、弥陀の招喚、釈迦の發遣、この「二尊之意に信順」することが説かれるのである。⁽⁵⁾歸するところは十八願意にあるが、それを勧める積尊の教意によつてあきらかにされるのである。このように善導の釈迦・弥陀二尊の見方を親鸞も繼承するのである。

ところで親鸞の積尊観には、善導を繼承し親鸞独自の積尊

観が示されるのである。二尊二教の立場より、二尊一教の教意となる。「化巻」では、釈尊一代の教に此の土で入聖得果する聖道門と、安養淨刹に於て入聖証果する淨土門のあることを説く。しかも聖道の諸教は、像末法滅之時機に非ず、時機に、背ける教であり、淨土真宗は、在世正法、像末法滅の三時を貫ぬき、濁惡群萌を悲引したまう教であることを述べる。二尊二教の教法は、末法における深い内観によつてその真意をみるときに、弥陀の本願の教法より外なきことが示される。釈尊の一代の教法は淨土三經の開顯にあるという帰結が示される。

これを『正像末和讃』では、「釈迦の遺法ごとく龍宮にいらたまひにき」と述べ「正像末の三時には弥陀の本願ひろまれり」と讃えるのである。⁽¹⁸⁾二尊二教は、帰するところ二尊一致にあることがあきらかにされ、

釈迦・弥陀は慈悲の父母 種々に善巧 方便し われらが無上の信心を 發起せしめたまひけり (眞聖全二・五一〇頁)

と讃えるのである。釈尊一代の説法中、聖道門、要門、真門のすべては、十八願の信心を發起せしめるための釈迦・弥陀二尊の巧みな方便であることをあきらかにするのである。

釈尊は此土出現の応身ではあるが、種々に善巧方便し、弥陀の弘願意をあきらかにするための応身であることが知られるのである。これを「教巻」では、『大無量壽經』こそ、出

世の本懷經であり、大意は、弥陀は誓いを發し、法藏を開いて一切の衆生に、功德之宝を施することを述べ、釈迦は、一代の教法を光闡し、群萌に真実利を恵まんとすることであると述べている。釈尊一代の經説は『大經』にあり、本願と名号の開顯にあつたと結論づけるのである。これを「諸經和讃」において

久遠実成阿弥陀仏、五濁の凡愚をあはれみて 釈迦仏としめして
そ迦耶城には応現する (眞聖全二・四九六頁)

と讃えるのである。久遠実成の阿弥陀仏は、此土の迦耶城に釈迦仏となつて応現されたと説くのである。弥陀の応身としての釈迦をより具体的に指摘される。

しかも「教巻」の出世本懷の意よりみるときに『大經』にもとづき、本願名号を説き示す釈尊であることを説いたが、發起序の説法の形式よりみてその五徳の瑞相をあらわすことでまた、出世本懷とみるのである。⁽¹⁹⁾弥陀三昧に安住し、説法利生の利他行をなすとみるのである。弥陀三昧に住する釈尊とは、釈迦が弥陀となり、弥陀が釈迦となるという見方で、すでに従来の研究において『二尊大悲本懷』の研究などによつて指摘される釈迦仏即阿弥陀仏という釈尊観があるが、いまは「教巻」の説示の中にこれを見ることが出来るのである。釈迦即阿弥陀という釈尊の見方によれば、報・応の二身のうち応身は、融ぜられて、報身そのものとして語られるの

である。

法身と報身の関わりについては、後述したいが、法・報・応の三身観は、帰するところ報身一つに納められるのである。

三

四身説については、『愚禿鈔』にあげられるところであり、「仏に就いて四種有り、一には法身、二には報身、三には応身、四には化身なり」と法・報・応・化の四身説を述べている。四身説の背景については種々に指摘されるところであるが、『大乘義章』十九に四身をあげ、応身より無量無辺の身を化現するのが、化身であり、化身より変化し、或は、種々の人相に変化するをいう。天台大師の『摩訶止観』第八に「法報応化の四身を本となす」と四身説をあげ湛然の『止観輔行』第八之二では、これを解釈して「応より更に化身を開出す。法報に対する故に四と為すを得る」と述べている。道綽・善導は三身説であるが親鸞が三身説とともにさらに四身説を用いたのは、かつて学んだ天台系典籍の影響とみることが出来る。

「証卷」では、その冒頭に、証とは何かを明示してその後「然れば弥陀如来は如より来生して、報・応化種々の身を示現したまう」と四身説で結ぶ。しかも一如、真如より来って種々の身を示されると説くことは、応身より開かれる化身で

あっても、一如真如を根源とすることが知られるのである。

『唯信鈔文意』では、これをさらに具体的に「この報身より応化等の無量無数の身をあらわして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆへに尽十方無碍光仏とまうすひかりの御かたちにて」と述べる。この『唯信鈔文意』では「証卷」をさらにうけて、報身如来より、応化身となり、しかも微塵世界の無量・無数の身をあらわす、或は十方微塵世界にみちみちてましますとも説く。この点をさえて『浄土高僧和讃』等では、「大心海より化してこそ善導和尚とおはしけれ」「阿弥陀如来化してこそ、本師源空としめしけれ」などと讃えている。また『浄土和讃』において「三経和讃」のはじめに、『観経』において浄土の教法を興起する縁となった人々の名前を列挙している。十五の聖者が列記されているが、その中には、提婆尊者や阿闍世王、守門者までつけ加えられている。上のように、三身論を展開させて四身説が、説かれていたが、この関係をつめていくと、報身中心の阿弥陀仏観であることが知られる。

四

次に親鸞の報身阿弥陀仏観について述べたい。第一に因願酬報の報身であることが強調されている。「行卷」偈前の文では「仏土は報仏報土」とであると明示し、「真仏土卷」では

「仏は、則ち是れ不可思議光如来なり、土は亦是無量光明土也。然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に真報仏土というなり」とも述べている。先述のように善導が報身をあきらかにするについて、弥陀の浄土は、報土なるか化土なるかを問

答し、十八願取意の文を引いて「今既に成仏したまへり、即ち是酬因之身也」と示し、親鸞は十八願より、十二、十三願を聞いて、かぎりなき光とかぎりなき命の仏であることを述べる。十二願・十三願を「真仏土巻」に引いてこの願に酬報した仏身、仏土であることを示す。光寿二無量をあらわすうちでもその中心は、光明無量をもってあらわすのである。

依、正二報の果の中より、依正は不二であるが、弥陀の正報を中心とみるのである。しかも光明無量を中心として示されるのである。いまその引文をみれば、寿命無量を証する文は、(一)正依の十三願文(二)成就文(三)真言經の寿命無量の文であるが、大經の引文など残りは光明無量について証するのである。例えば、十二願名を引いた後、十二願成就文で十二光を示し、これを『如来会』で十五光をあげて証明し、『大阿弥陀經』で十三句をあげて光明を称誉する。さらに、その後も十二光に関する文を引く。無量の光を十二光にしばって阿弥陀の働きや、特質をあらわすのであるが、いかに綿密に光明無量を証する引文を調べ、引証しているかが知られる。

また、十二願成就文では、かぎりなき光をうけるものの利

益が示される。どこまでも動的に、三塗勤苦の身さえも救うことをあらわすのである。

これらは、また和語の法語などでも言葉をつくして語られるところであり、『浄土和讃』のはじめにおかれる「讃阿弥陀仏偈和讃」などでは、曇鸞を継承しつつ、かぎりなき光の仏の活動相を言葉をつくして讃えるのである。

五

次に前述のように「真仏土」巻では、この報身の阿弥陀仏を「仏は則ち是れ不可思議光如来なり」とあらわすのである。この問題について述べたい。この不可思議光如来の名は、「如来会」十五光より引かれるところであり、難思光と無称光の意を合して不可思議光とあらわすのである。すでに不可思議光は曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』に言及されるところである。しかし「行巻」では、「無碍光如来の御名を称する」とあり、無碍光如来という名であらわす。その相違については、先哲の種々論ぜられるところである。

晩年『唯信鈔文意』では、不可称不可説不可思議の尊号で、智慧の名号であることを述べる。『弥陀如来名号徳』では、⁽²⁶⁾十二光の一々について解釈する。さらに阿弥陀仏は智慧のひかりであるから無碍光であると、再度、無碍光の解釈におよび、これを尽十方無碍光如来、不可思議光仏と述べる。

そして「行卷」の大行は、無碍光仏の御名を称することであり、無碍光仏の御ちかひをふたごころなく信ずるゆえに無量光明土にいたれば、自然に無量の徳を得しめ広大の光を具足す。故にさまざまなさとりをひらくとも述べる。

その後、難思光仏と無称光仏を出して、こころもおよばず、ことばもおよばず「南無不思議光仏」とあらわすと述べる。

さらに十二光を智慧のひかりである無碍光であらわし、その根源を浄土にみる。不可思議光は「最尊第一をあらわす」と説くが、その最尊第一をあらわす理由は、あらゆるとらわれをはなれた、真如、一如の世界をあらわし、しかもつねに動的な活動相をあらわす点にみる。救いの根源を仏教の原理であらわし、より種極的にその救いの活動相を示す。

六

先述のように阿弥陀仏を不可思議光とあらわし、一切のとりわれを離れて、しかもその活動性を積極的に明示する主張は、親鸞の二種法身説に深い関わりをもつと言えよう。この二種法身説は、最も大きな特質の一つである。二種法身について言及するところは、「証卷」に曇鸞の「淨入願心章」を引文し、二種法身の文を継承する。また『愚禿鈔』『唯信鈔文意』『一念多念文意』に親鸞の解釈をみることが出来る。

『往生論註』には、願心によって莊嚴された三嚴二十九種の浄土の莊嚴相は、一法句の清浄・真実・無為・法身に摂さまるといふ広略相入をあきらかにするが、その文中において、法性法身と方便法身をあげ両身は由生、由出の關係にあることを述べる。法性法身はよく方便法身によって顯現することによりその力用を全うするのである。二而一、一而二の関わりを述べるのである。また一法句を解釈して「法性寂滅なるが故に、法身は無相なり、無相の故に能く相ならざる」と無し、是の故に「相好莊嚴即法身也」と述べる。さらに『論註』の般若と方便との関わりを述べ、般若とは、真如に達する慧の名であり、方便は、衆生済度の手だてに通ずる智慧であると述べ、心行寂滅の真如一如は、そのまゝ、衆生救済の活動となり、衆生救済の活動のまゝ、寂滅の智なることを説く。ここに法性法身と方便法身における由生由出の関わりを論ず。法性法身は本来、方便法身とならざるをえない本質をもち、方便法身によってよくその働きを成ずる。この考えは、親鸞に強い影響を与えるのである。即ち『論註』の真如、一如觀にすでに動的な見方をふくむものである。これを親鸞は継承しながら、さらに展開させたのである。

前述のように、「証卷」の冒頭に証果において滅度の異名を列挙し「弥陀如来は、如より来生して、報応化種種の身を示現したまう」と如より来生の弥陀如来を述べるのであり、

法性法身より顯現の方便法身を示すのである。

『愚秀禿』では、

法身に就て二種有り、一には法性法身、二には方便法身なり

(真聖全二・四五八頁)

と述べる。『唯信鈔文意』や『一念多念文意』との関わりにおいて、この文をよめば、二種法身こそ、仏身論の中心であることが知られる。

『一念多念文意』では、二種法身の関係について、一如真如、無上涅槃、法性、如来とその異名をあげ、無上涅槃の内容において、一切衆生をきらわず、導きたまうと示す。動的なはたらきをまとめ、この一如よりかたちをあらわし、従果降因の報身の阿弥陀仏であることを説く。『論註』の説く願心莊嚴の世界の特質をさらに積極的に説示するのである。

また『唯信鈔文意』でも、親鸞の阿弥陀仏觀の特質がよく示されている。法性法身は、無色無形、言亡絶慮の一如をあらはし、この一如より、従果降因して法蔵菩薩は、四十八願を發し、とくに光・寿二無量の本願に報いて成就した仏であり、方便法身、阿弥陀如来である。この如来を不可思議光如来とあらわし、尽十方無碍光如来とあらわすのである。『論註』をうけ「証卷」などに引証される二種法身論をよりわかりやすく、和語で表現したのである。真如一如は、単に静かなる理ではなく、阿弥陀仏の証りの内容としてみるべきであ

る。「この一如よりかたちをあらわし」の文意は「ひかりの御かたちに、いろもましまさず、すなはち、法性法身におなじくして、無明のやみをはらひ、惡業にさへられず、このゆへに無碍光とまうすなり」とある。⁽³⁾二種法身を時間的に解釈するのではなく、空間的に解釈すべきである。この点を証明するものとして、親鸞の『浄土和讃』に注目したい。

弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫とときたれど 塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみへたまふ (真聖全二・四九二頁)

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて 釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する (真聖全二・四九六頁)

と讃えるように、十劫成道を、久遠成道の阿弥陀仏とみて、無始無終の報身論が説かれるのである。法性法身と方便法身相即しつつ方便法身中心の阿弥陀仏觀を説くのである。このような久遠成道の思想は、天台教学の影響をうけるところであり、十劫と久遠がどのような関わりにあるかは、なお論すべき問題が多くある。⁽³⁾機会をあらためて論じたい。

1 『逆修說法』(法然全・二三三頁)、「法然上人御說法事」

『西方指南抄』所収・一六四～一六五頁)法然全(一六六頁)、拙論「法然上人の仏身觀」(真宗学四四号)

2 真聖全二・五四六頁

3 真聖全二・一四一頁

4 真聖全二・一四一頁

5 『觀經』真身觀(真聖全一・五七頁)『論註』(真聖全一・三

親鸞の仏身観（浅井）

〇〇頁〕「定善義」（真聖全一・五二二頁）いずれも真身観を真仏とみている。

6 真仏と化仏について『六要鈔』では①観仏に約せば真実身である、念仏所見の身に約せば方便の身となる。②念仏衆生攝取不捨の時は、真身、報仏であり、化仏は円光中の化仏をいう（真聖全二・三七二頁）

7 真聖全二・四五七頁

8 大正蔵・四四・八三七頁

9 『金光明文句』卷二（大正蔵三九・五三頁）

10 真聖全一・三八九頁

11 「玄義分」（真聖全一・四四二頁）

12 「証卷」（真聖全二・一〇三頁）、『論註』（真聖全一・三三七頁）

13 真聖全一・六三〇頁

14 真聖全二・一二〇頁、一四二頁

15 真聖全二・一三四頁、一三五頁、一三七頁

16 真聖全二・一三七頁

17 真聖全一・四四三頁、五三四～五三七頁、五四一頁

18 「化卷」（真聖全二・一五五～一五六頁）、『正像末和讃』（真聖全二・五一六～五一七頁）

19 数卷（真聖全二・二～三頁）

20 信楽峻磨氏「親鸞における釈迦仏と弥陀仏」（日本仏教学会年報五十三号）参照

21 『愚禿鈔』（真聖全二・四五八頁）、『大乘義章』（大正蔵・四卷、八四一頁）『摩訶止観』（大正蔵・四六卷・一〇六頁）、『止観輔行』（大正蔵四六卷三九六頁）、『愚禿鈔聞書』（真宗大系・一八卷・六九頁）『愚禿鈔温故録』（真宗全書三七卷・二七

七頁）『愚禿鈔摸象記』（真宗叢書九卷・四〇頁）

22 「証卷」（真聖全二・一〇一二頁）『唯信鈔文意』（真聖全二・六三〇～六三一頁）『高僧和讃』（真聖全二・五〇八・五一四頁）『浄土和讃』（真聖全二・四九一頁）

23 「行卷」（真聖全二・四三頁）『真仏土卷』（真聖全二・一二〇頁）

24 「玄義分」（真聖全一・四五七頁）、『真仏土卷』十二・十三願成就文引証（真聖全二・一二〇～一二三頁）

25 「真仏土卷」（真聖全二・一二〇頁）『讃阿弥陀仏偈』（真聖全一・三六五頁）

26 「唯信鈔文意」（真聖全二・六二一～六二二頁）『弥陀如来名号徳』（真聖全二・七三三～七三七頁）

27 『研鑽集記』（一八三～一八四頁）では、①最尊第一の徳をあらわさん②往生即成仏の義をあらわすの二義をあげ後説をよしとする。

28 「証卷」（真聖全二・一一一頁）『愚禿鈔』（真聖全二・四五九頁）、『唯信鈔文意』（真聖全一・六三〇頁）、『一念多念文意』（真聖全二・六一六頁）

29 真聖全一・三三六頁、三三七頁、三四二頁

30 真聖全二・一〇三頁

31 真聖全二・六三一頁

32 普賢大円氏著『真宗教学の発達』三〇～三二頁

33 神子上恵龍氏『弥陀身土思想史展開』

△キーワード 仏身、阿弥陀仏、報身

（龍谷大学教授）